
IS ~ 狩人の系譜 ~

GONZA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜狩人の系譜〜

【Nコード】

N8671S

【作者名】

GONZA

【あらすじ】

塔でヤマツカミに呑み込まれた青年は女尊男卑が当たり前前のISの世界に来てしまった……

プロローグ（前書き）

モンハンとESのクロスオーバーです

初投稿で駄文ですが良かったら読んでいって下さいm——m

プロローグ

とある塔

青年はそこに居た

対峙するのは巨大な古龍

人の数倍の大きさと深緑の苔を纏う“ヤマツカミ”

青年が背負うのは自分の身長程あるつかという巨大な剣

その大剣で脚に斬り掛かる

切り口から体液が出るが意に介さない古龍

逆に脚で叩きつけるように攻撃するが青年は躲す

その攻防が幾度となく繰り返される

不意に古龍は巨大な口を開け、青年を吸い込んだ

青年は為す術無く吸い込まれる

あとに遺るは古龍と塔の古くからの静寂のみ

異世界で青年は何を成すのか

プロローグ（後書き）

これだけ書くのにも結構時間かかる…；、（

モンハン3rdの説明書にあるような語り口風で書いてみました。

一話 ハンターとISと異世界と

学園内に侵入者の報告を受けて急行したのは二人の女性で一人は黒髪のロングで眼つきが鋭いスーツ姿の女性、二人目は緑の髪をショートにした眼鏡をかけた女性だった。

スーツの女性を織斑千冬、目の女性は山田真耶といった。

そこに居たのは両肩からそれぞれ一本の角が出ている鎧の様な防具を身にまとった一人の男だった。

そして鎧は光の粒子となって龍を型どったペンダントになった。

「え、えつとやっぱりこれはISなのでしょうか？でも男の人ってISは起動しないんじゃない？……。そしたらこの人は何者！？」

真耶は驚きながら千冬に聞く。

「山田先生落ち着いて下さい。確かにISは男性では起動しない筈だった。しかし我が弟も起動させている。……可能性にはありません。」

内心驚愕しながらも落ち着いて返す千冬。

「そ、それもそうですね……。ところでこの人はどうします?」

「ここに置いておいても何にもなりません。とりあえず医務室に移
しましょつ。」

青年ハンターの異世界ライフが始まった。

一話 ハンターとISと異世界と(後書き)

とりあえず第一話。

防具はディアブロXだと思って下さい。

設定／主人公

・大村 湯雲 （おおむら ゆくも）

容姿：上の上

年齢：16歳

髪の色：黒

瞳の色：黒

身長：172？

体重：78？

趣味：肉焼き 採掘

性格：大雑把 呑気 鈍い

好きなモノ：仲間 肉 素材 温泉
ハント

嫌いなモノ：面倒な事 仲間を傷付ける者

IS：TNE HUNTER（ディアブロX）

武装：

アーティラート（大剣）

龍刀【劫火】（太刀）ミストラル・ダオラ（片手剣）

封龍剣【真絶一門】（双剣）

エンデ・デアヴェルト（ガンランス）

へ
ビイ
ボウ
ガン
老
山
龍
砲

幻獣筒【三ツ角】（ライトボウガン）

単一仕様能力：アイテムポーチ

設定〜主人公〜（後書き）

設定です。

名前は

ジャンボ村 大村

ユクモ村 ユクモ

って感じに作ってみました。

ISはチート化させる気は無いですが……バランス取るの難しそう
です（；、、）

モデルは鋼の錬金術師のマスターング大佐です。

因みに私は大剣厨でした（笑）

二話〜医務室にて〜（前書き）

無理やり感がヤバイです（泣）

う〜ん難しい……。

二話〜医務室にて〜

「んっ……………ここは……………」

青年が気がつくところそこはキャンプでも村の自室でも無い薬品の匂いがする部屋だった。

（俺はヤマツカミに吞まれて……………アイルーが運んで来たのか？それにしてもベースキャンプって訳でも無いが……………）

少し考えて出した結論は

「ま、いいや。」

生きてれば理由はどうあれそれでいいらしい。

全然良くないと思うが……………。

とりあえず、ここから出ようと試みるがドアは鍵が閉められている。窓から出ようにも地上は遙か下。防具有りでも流石に辛い。

（そういえば、俺のディアブロXと角王剣は何処だ？）

ヤマツカミ討伐の際に装備していた武器防具一式無い。今は下に来
ていたインナーのドンドルマルツクのみだ。

(さて、どうしたものか……)

正直、鍵はぶち壊せば何とかなる筈だ。しかし介抱してくれた部屋
の主に悪いし、装備が無いのでその後はどうしようも無い。

久々に頭を働かせて、煙の様なモノが立ち上ぼり始めた時扉が開い
て黒髪の女性が入って来た。

「目覚めたか。」

開口一番にそう言うと、女性は青年を値踏みするように見つめた。
「わざわざ古塔から済みません。ヤマツカミの前から連れて帰るの
は大変だったでしょう。」

青年が苦笑いしながら答えると

女性は訝しげな顔をしながら何の話だと聞く。

青年が古塔から連れて来たのでは無いのかと尋ねた。

「お前は何処から来た？」

女性は微妙に殺気を放ちながら問う。

「ポツケ村です。」

「……………何処だ？そこは。日本か？」

「ニホン？何処の村です？」

「……………お前の知ってる地名を挙げてみる。」

「ポツケ村 ドンドルマ ココット村 ミナガルデ ジャンボ村
ユクム」もついい。「……………あい。」

女性によるとここは俺が居た世界とは違うらしい。

……………まさにヤマツカミの口の中は旅の扉だったとは。

「まあいい。私は織斑千冬と言う。お前は行くあてが無いのだろう
身元の保障はしてやるから6ヶ月後この学園に入れ。名前はなんと
いう？」

「……………大村由雲。」

「ほう やけに日本的な名前だな。「千冬は片眉を上げ、少し驚い
た様な口調で話す。」

ヤマツカミ

「もと居た世界の俺はアイツに倒された存在です。ここで新たに
“大村由雲”として生きます。」

「いい覚悟だ。では半年後ここに入学しろ。」

こうして、大村由雲としての生活は始まった。

二話、医務室にて、（後書き）

ファーストコンタクトなので慎重に書いた「つもり」です。

感想や意見待ってます。）、）、／

三話〱置いてきた者達への慟哭〱(前書き)

なんか一話一つ一つが短い気が……

んで、ISチート化は避けました。

三話く置いてきた者達への慟哭く

千冬と湯雲がそれぞれの世界の相違点などを話してみると、お互いに驚く所が多々在った。

千冬側からすれば、人間の何倍もの大きさの生物を“狩る”事や喋る猫との共同生活（千冬はこれに猛烈な興味を示した）

湯雲側は、大型の空を乗り物無しで飛べる事、手の平サイズのハコで遠くにいる人と会話が出来る……など様々である。

「そういえば、俺の武器と防具は知らないですか？薄い茶色の武器と防具です。」

ひょいと湯雲が尋ねてみると、千冬は当たり前前の様に

「ああ。あれはISになったぞ。今解析中だ。」

（。。。）

（。。。）

（。。。）

今度こそ湯雲の頭はフリーズした……。

「えっと……。どういう事で？」

湯雲は再起動して聞く。

「こつちが聞きたい。身にまとっていた。防具が急にISになったんだからな。いったいどうし（ボタンッ！）」「お、織斑先生！ちょっと来てください！」「……すまんな。」

そう言って退室していく千冬。

湯雲はといつと……。

（とりあえず寝るか！）

さっさとベッドに潜って寝てしまった。

どこまで暢気なんだか。

一方湯雲のISを解析し終えた真耶と千冬はデータをチェックしていた。

「な、な、なんですかこのISは！？コアは467個のどれにも該

当しないし、150しか無いシールドエネルギーに、エネルギーを使ってそれぞれの武器固有の特殊能力を発動して……色々出鱈目すぎじゃ!?!」

真耶はかなり慌てている。

「コアは異世界のモノだからしょうがないだろう。シールドエネルギーの少なさは……。
ほお……フンオフアヒリテイ単一仕様能力で補われているな。武器もなかなか豊富でなかなか面白いじゃないか。」

なにやら嬉しそうな表情の千冬と逆に釈然としない真耶。

「ISの名前は“THE HUNTER”で防具は“DIABRO”。“狩る者”と“悪魔”凄いですね……。」
「まあ、データも取ったし持ち主に返すでしょう。」

と言う事で湯雲に待機状態のペンダントの形でISは返却された。

その夜

一時期な宿泊場所として湯雲はホテルに居た。

ベランダに出ると月は満月。森丘から見える月と差異は無かった。

(皆どうしているかな……)

ポツケ村の村長、武器屋のおっちゃんや行商はあちゃん・ギルドの人々……それにオトモアイルーのミーシャ。

あちらでは自分は死んだも同然だが一応は生きている。生きているが会えない・連絡も出来ない。それが堪らなく辛かった。

一つ儲けた命だったが酷く要らないモノに思えた。

もう会えない人々に思いを馳せ、湯雲は一人 泣いた。

月は静かにそれを見守る

三話〜置いてきた者達への慟哭〜（後書き）

次回は半年後からです）、）、（）／

感想や意見待ってますm）——（）m

四話〜狩人の出会い〜（前書き）

難産だった……。

半日近くかかってしまった（汗

四話〜狩人の出会い〜

湯雲は自分の教室 1-1で副担任の真耶の話を聞いていた。しかし周りからの視線が尋常じゃない。

自分と同じ男の織斑一夏の方を見てみると同じような状態であった。(リオレイアに睨まれた時より怖い……。)

そんな事を考えていると、自己紹介に入り、湯雲の番が回ってきた。

「大村湯雲です。男ですけどISが動かせるという事でここ入りました。よろしくお願ひします。」

めんどくさいので無難な挨拶で済ませて席に戻ろうとすると、やはりギラついた視線が自分に向けられている。

(こ、怖い……)

湯雲、入学早々辞めたくなった。

誰一人返事をする者はいなく一人の生徒に釘つけになっていた。

そして、一夏の番。

「織斑君？織斑一夏くんっ」

「は、はい!?!」

気まずさと緊張から真耶に呼ばれているのを気付かず反応が遅れ声が裏返ってしまった。

周りからクスクスと笑い声が聞こえて、ますます落ち着かない気分の一夏。

「あ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？でも次の自己紹介は織斑君の番なんだよね。えっ、えっと自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「あ、はい。織斑一夏です。よろしくお願いします。」

「え、えっと他には？」

「以上です」

ガタタツ！、一夏の発言に期待していた女子がズッコケた、趣味とか好きなものを喋ればいいものを何も言わず終わらせてしまった、

あまりのことに真耶も涙目になっている。すると、パァンツ！！と乾いた音が響いた、一夏は痛む頭を押さえながら恐る恐る、後ろを振り向くすると

「げえっ、関羽！？」

ガスツ！！今度は角で叩いた、

「誰が関羽だ、馬鹿者」

そこには一夏の姉である織村 千冬の姿があった、手には出席簿を持っている。

「お、織斑先生。会議はもう終わられたんですか？それとそちらの生徒は・・・」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけて悪かったな。私が担任の織斑千冬だ。」

諸君らはこれからISの基本的知識を半月で覚えて貰う。その後実習だが、基本動作は半月で覚える。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

無茶振りにも程があると一夏はぼんやりと考えていると、また叩かれた。

「よう、お前が織斑一夏だな。俺は大村湯雲だよろしくな。湯雲って呼んでくれ。」

「ああ、俺も一夏でいい。よろしく。」

「ちょっといいか？」

「え？」

「ん？」

「……箒？」

「……。」

近づいて来ていきなり一夏を呼んだのは長い黒髪をポニーテールにし、少しきつそうな眼をしたどこか日本刀を思わせる雰囲気を出す少女が一夏の前に立っていた。一夏の知り合いらしい。

「廊下でいいか？」

突然の事で一夏が反応に遅れてると、箒と呼ばれた少女はさっさと廊下に向かう。

「早くしろ。」

「お、おう。じゃ、湯雲。行ってくるわ」

「ん、いつてらっさい。」

一夏が廊下に行くと、視線が湯雲に集中する。
もう慣れてしまった湯雲はポケットとしながら待っていた。

二時間目が終わると、一夏は少し煤けていた。

「何なんだよあの呪文の羅列は…。全然意味わからん。」

「アホかお前は。渡された分厚い本はどうした？」

「古い電話帳と間違えて捨てた。」

呆れる湯雲……。

「……やっぱりアホだ。しょうがない、今度渡してやるよ。」

「マジか！？サンキューな！湯雲！」

「なに、困った時はお互い様だ。」

湯雲が男臭い笑みを浮かべながらそう言っていると

「ちょっと、よろしくて？」

「あん？」

「へ？」

唐突に後ろから声を掛けられたので振り向くとそこには長い金髪でいかにもお嬢様な雰囲気醸し出した少女がいた。

「訊いてます？お返事は？」

「あーなんだ？」

「あ、ああ訊いてるけど……なんの用件だ？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも栄光なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「悪いな、俺達は君が誰か知らないし。」

（一番嫌いなタイプだなこういうヤツ。）

湯雲は不快感を感じている。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問していいか？」

一夏が尋ねる。

「フン。下々のものの要求に応えるのが貴族の務め、よろしくてよ。」

「代表候補生ってなに？」

「「は？」」

(うわっ、ハモツた！鬱だ死のう。)

湯雲がしょうもない事で落ち込んでいる間に話は進む。

「あなた、本気で言ってますの!？」

すごい剣幕でセシリアは一夏に詰め寄った。

「おう。知らん。代表候補生って何だ？」

「えつとな、国家代表IS操縦者の候補生、お前にもわかりやすく言えば昔の千冬の姉御の立場になる前、一応エリートって事になるな」

鬱状態から復帰した湯雲が答える。

「そついう事ですね。本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう

少し理解していただける？」

「「そうか。それはラッキーだ」」

シンクロしながら答える一夏達。

「・・・馬鹿にしていますの？」

「「いや、別に。」」

因みに2人とも素である。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少し期待していましたが、結局期待外れですわ」

（（ほつとけ。））

「ふん。まあでも、わたくしは優秀ですから、貴方達のような人間にも優しくしてあげますわよ」

“貴方達のような人間”という一夏や自分を見下している口調に反応する湯雲。

「ISの事でわからない事があれば、まあ……泣いて頼まれれば優しく教えて差し上げててもよくなってよ。何せわたく「おい。」…：な！？」

セシリアが驚いたのは彼女の首に湯雲の片手剣“ミストラル・ダオラ”が当てられていからである。その刃からは冷却が漏れている。

「俺はどうでもいいが、仲間が貶されたのは解せんな。」
ドスのきいた低い声でそう言う湯雲。

「そ、それは謝罪します……。も、申し訳ありません。」

謝りはするものの納得してないセシリア。

「い、いや俺は別に気にしてな（バシッ バシッ）ぐふっ！」

一夏の背後に居たのは千冬である。一夏は悶絶しているが、湯雲はあまり痛がってない。

「入学早々に何騒ぎを起こしている？決着を着けたらければ、クラス代表選抜で着ける。」

「千冬ね…織斑先生、クラス代表ってなんですか？」

一夏は千冬からの殺気を感じ、とっさに言い替える。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……。まあ、クラス長だな。因みにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいろ。」

「それでいいですわ！実力から行けばこのわたくしが代表に選出されるのは必然ですわ！物珍しいという理由で運だけの男が選ばれるなど論外ですわ！そんな屈辱の一年間をわたくしが味わわないためにも決闘です！」

勢いを取り戻したセシリアはビシッと一夏達を指さして言う。

「へ？俺も？」

「当たり前です！」

湯雲は自分は関係ないと思ってたのでびっくり。

「決まりだな。他にやりたい奴はいるか？居ないならこの3人で締め切るぞ。」

立候補するものは誰も居なかった。

「では、1週間後に試合を行う。各自準備を抜かるなよ。」

こうして、初っぱなから目立ってしまった湯雲であった。

四話〜狩人の出会い〜（後書き）

ちよつとクラス代表のクダリが強引な気だな…（ - - … ）

文才が欲しい〜

五話 暴君の戦士と白き騎士

セシリアと決闘をする事になった湯雲達は千冬の許可を取り、放課後の空いている時間帯に第3アリーナの使用許可を取り付けた。

因みに、一夏に訓練をしようと云って聞かない筈も一緒である。

一夏には専用機が届くという話だが、間に合って居ないため打鉄で訓練をする事になっている。

「とりあえず、模擬戦をするぞ。」

「ああ。で、お前は機体良いのか？」

打鉄を装着し終えた一夏が尋ねる。

「俺は……一応専用機があるからな。」

自嘲気味に湯雲は答える。

“専用機”になってしまった“相棒”の事を意識すると元居た世界の事を考えてしまう。

女々しい考えを断ち切る様に自分の頬を叩き、喝を入れる。

「行くぜ……！ディアブロ！」

ISが展開され、そこに居たのは何処か古めかしい戦士を想像させる出で立ちをした湯雲だった。

「な！？全身装甲だ！？しかし、こんなIS見たことが無いぞ！
フルスキン！」

箒が驚きの声を上げる。湯雲のISは元々異世界のモノだから見たこと無いのは当たり前である。

湯雲がカタパルトから飛びでてアリーナステージに降り立つ。まだ、お互いに飛ぶという事に慣れていないので地表での戦闘である。

一夏が打鉄の刀を取り出し、湯雲も切火を呼び出す。

にらみ合いの末に…

「行くぞ!!」

お互いの刀が交錯した。

小手調べなので湯雲は受けに回り、一夏が攻める。袈裟切りを逆袈裟で相殺し、凧ぎ払いを斬り上げでいなす。激しく斬り合っているのに、腰の位置は変わらない。湯雲は箒が驚嘆する様な立ち回りをしていた。

「今度はこっちから行くぜ!」

「なに!?!くっ!?!」

湯雲が最小のモーションで一夏の刀を横に反らせ、刀を突き出し首の寸前で止める。

勝負はあっけなく着いた。

「えつとだな、とりあえず基本的な事が出来てない。ISを動かすのに必要な体力や集中力が成ってないな。それは、剣道でも身につくから」大村！その役目は任せろ！私がやる！」

名乗りを挙げたのは勿論箒である。一夏は物凄く嫌そうな顔をしていたが何も言わない、というか箒の勢いに圧されて言えない。

「そうか？んじゃ、篠ノ之頼むな。ISの座学は…「それも私が！」いいの？任せちまって？」

湯雲の間に箒は勢いよく首を縦に振る。箒からすれば、一夏と一緒に居られるからむしろ願ったり叶ったりである。

湯雲からすれば、説明が苦手な話を聞くより身体で感じるというタイプだからありがたい申し出だった。

「じゃ、宜しくな。」

一夏達に背を向けながら手を振り、自分の部屋に戻る湯雲。因みに一人部屋で一夏は箒と相部屋だった。

「ち、ちよつと待て湯雲！お前も（ガシッ）げっ！」

「一夏……やるぞ…時間が無いんだ…。」

せつかく二人で居られるトコを邪魔されたら嫌なのでさっさと一夏を引きずって行く箒。

「や、やめろ！俺はまだ死にたく…アッー！！」

アリーナに一夏の叫びが響き渡った……。

約束の1週間後ビット搬入口

一夏達は入り口に居た。

扉が開き、そこに在ったのは白き騎士。

何物にも汚されない純白のISだった。

六話、誇り高き暴君は大空を舞う（前書き）

戦闘の場面をかなり濃く書いた積もりです（、）、（）／

六話 誇り高き暴君は大空を舞う

第三アリーナAピット

「……………俺の一週間の訓練ってなんだったんだろっな？なめ篤？」

「……………」

「目をそらすな！」

一夏の醜態を見た篤はISの知識・基本動作の一つも教えることなく道場で一週間延々と竹刀を振らせていたのだった。

因みに、湯雲はというと基礎トレーニング以外なにもしてない。

「いいから早くしろ。お前のISが届いた。」

官制室から千冬が急かす。

ゲートが開いて、そこに佇んで居たのは白いIS。

「それが織斑君のIS“白式”です。」

千冬と同じく官制室にいる真耶が説明する。

「フォーマットとフィッティングは実戦でやれ。さっさと出撃しろ。でなければ帰れ！」

「お、織斑先生落ち着いてください。」

興奮しているのか、某組織の総司令のような事を言っている千冬とそれを宥める真耶。いつもと逆の構図である。

一夏が白式に触れると頭に情報が流れてくる。

「なんだ……？ 馴染む……懐かしい感じた……。」

一夏は呟くが千冬や箒に聞こえなかったらしい。湯雲は聞こえていたが、言っている意味が今一わからないので何も言わない。

「ISに背中を預ける様にしろ。座る感じでいい。」

千冬の指示どおりにし、白式を装着する。

「じゃ、行って来る。」

「ああ……勝ってこい！」

「ま、頑張れよ。」

出る間に一夏は箒達に声をかけ、箒達もそれに答える。

そして、カタパルトに乗り、白き騎士はアリーナへ飛び立った。

「余りに遅いので逃げたのかと心配いたしましたわ。ですが、逃げずに来た貴方のその蛮勇には敬意を払いますわ。」

「そいつは悪かったな。それより、さっさと始めようぜ。」

嫌みを軽く流し、構える一夏。セシリアもそれに習う。

『それでは、セシリア・オルコット対織斑　一夏のクラス対抗戦選
手決定戦を開始します。始め！！』

結果からいうと一夏は負けた。

セシリアのIS“ブルーティアーズ”のビットに序盤は翻弄去れて
いた一夏だったが、途中から特性と弱点を見抜き更に一次移行を成
功させ逆転勝利　かの様に見えたが、白式の単一仕様能力を上手く
扱い切れずにシールドエンプティーによる敗北だった。

ビットに戻って来た一夏はさすがに落ち込んでいた。あれだけ大見
得切ったのに情けない結果だったからである。

「気にすんな。俺が仇取ってやるから。」

ポンと一夏の肩に手を置きながら湯雲が励ます。

「ああ……！ 湯雲！絶対勝てよな！」

「当たり前！」

ニヤリと笑って湯雲はカタパルトへ向かう。

二人のやりとりを筭は眩しそうに眺めていた。

「“一夏さん”との戦いでは油断してしまいましたが、次はそうはいきませんわ！」

「？ おう、いつでもいいぜ。」

湯雲はアーティラートを呼び出し構える。
セシリアも身構える。

『次は、セシリア・オルコット対大村 湯雲のクラス対抗戦選手決定戦を開始します。始め！！』

「さあ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲を！！！」

セシリアはビットを射出し、攻撃させる。

「悪いが俺は盆踊りの方が好きなんでな！」

湯雲は地上に降りて回避する。

「湯雲君は何故地上に降りたんでしょうか？」

「ブルーティアーズはビットによるオールレンジ攻撃が可能です。地上に降りる事により、攻撃される範囲を狭めたんでしょ。……考えてたな。」

真耶の疑問に千冬が答える。

「くっ！何故当たらないんですの!?!」

「ちゃんとワルツを踊らせるならエスコートしてくれよな！」

ビットによる攻撃が当たらない事に焦るセシリア。湯雲は回転回避を織り交ぜながら躲している。

「今度はこっちからいかせて貰うぜ！」

湯雲は飛び上がって一気に距離を縮める。

「なっ!?!クッ！」

抜刀してそのまま袈裟切りで切り掛かるが僅かに擦る程度に終わる。

しかし、シールドエネルギーを大きく持っていかれる。

「あらあら、ちゃんと当てなさいな。そうしないと勝てませんわよ。」

「

（な、なんて出鱈目な威力なんですか!?）

セシリアは口からは余裕の台詞が出るが、内心は異常な威力に驚愕していた。

湯雲はそれを理解しているのか、何も言わない。

セシリアは着地に合わせて、スターライトmk-?を当てる。湯雲はアーティラートで防ぐ。

「クッ！」

「な、なんでシールドエネルギーが僅かしか減っていないんですか!?」

セシリアは今度は驚きを隠せない。アーティラートの防御システムにはシールドエネルギーは使われていない。しかし、防ぎ切れなかった攻撃がエネルギーを削る。しかし、湯雲のディアブロは元々エネルギーの量が少ないので、あと3、4発食らったらシールドエンブティである。

「あとちょっと攻撃を当てれば、私の勝ちですわよ。今降参すれば無様な負け姿を曝さなくて済みますわよ?」

セシリアは湯雲に言うが、それは自分に言い聞かせてる様にも見えなかった。

「当たらなければ…:どうと言う事も無い!」

いきなり、突撃して来た湯雲に反応出来ずに接近を許してしまう。振りかぶっている湯雲を見て

(この私が…… もう負けてしまっなんて……)

負けを覚悟したセシリアだったが、アーティラートの直撃を受けて貰ったダメージは微々たるものだった。

「な！？さ、さっきは出鱈目なダメージでしたのに！！」

これは、アーティラートの攻撃を繰り返す度に威力が減るという特性が原因だった。更に湯雲はガードをしてしまった為、威力は雀の涙だったのである。

湯雲は武装をアーティラートからヘビィボウガン“老山龍砲”に替える。

「私に射撃戦を挑むというのです！？無謀なことを！」

ビットで攻撃するが、その間セシリアは動けない。

湯雲はビットの攻撃を避けつつ、隙が出来た所で反動の少ない通常弾を撃ち込む。

「ちっ！」

セシリアはビットじゃ勝てないと判断し、スターライトmk-?で攻撃する。お互いの攻撃は当たらず、膠着状態になる。湯雲は弾を特殊弾頭の散弾に替えた。

散弾は文字通り面制圧がしやすい代物だが、撃つ度にシールドエネルギーを消費する諸刃の剣だ。

「！？ 散弾！？」

セシリアは必死に避けるが避けきれなかった弾が当たり、ジリジリと削られる。

流れ弾でビットが2つ破壊された。

「そろそろシメにしようか！」

湯雲は黄色の液体が入ったビンを呼び出すとそれを飲み干す。

「な、何を飲んでいるのですか!？」

急に水分補給を始めた湯雲にセシリアは戸惑う。不味そうなんて思ったのは秘密だ。

「（ゴクゴク）ぷはあ……これが俺のIS『THE HUNTER』の単一仕様能力、“アイテムポーチ”！」

アイテムポーチは湯雲のISのシールドエネルギーの少なさを補う為のものや、補助の特殊装備が格納されている。湯雲が今飲み干したのは、“強走薬”。特殊武装によるエネルギーの消費を一定時間無くすものである。何故飲んだら効果が出るのかは謎だ。

湯雲は武装を双剣“封龍剣【真絶一門】”に切り替え、セシリアに迫る。

（鬼人化！）

そう念じると真絶一門の刃がつつすらと赤い粒子を纏い、湯雲の目の色も紅くなる。その威圧感はさながら 鬼

湯雲は一気にセシリアに肉薄する。

「掛かりましたわね！」

ブルーティアーズの後ろ側が前にせり出す。

「ブルーティアーズは4機だけじゃ無くてよ？」

その瞬間、ミサイル型の誘導兵器が湯雲に殺到する。

「甘い！」

「なっ…えっ!?!」

湯雲はミサイルの間をすり抜けていた。すり抜ける間に斬りつけていたらしく、ミサイルは湯雲の背後で爆発を起こす。

これには試合を見ていた千冬や真耶も驚愕する。

「データによると、鬼人化すると反応速度やスペックが上がるらしいが…:…:こつも使いこなすとは…:。」

「す、凄いです…:。」

「さて、セシリア・オルコット。俺の仲間を貶したお礼、きつちりと払っぜ？」

「くッ！」

セシリアはスターライトmk?を撃つが当たらない。そして真絶一

門の攻撃範囲に入ってしまう。

「乱舞!!」

湯雲は高速で連撃を叩き込む。右で斬り、左で更に斬る。返す刃で更に斬る……………舞いを踊るように。

あっという間にセシリアのシールドエネルギーが底を尽く。

『セシリア・オルコットのシールドエネルギーエンプティーにより、勝者、大村湯雲!』

「じゃあ!」

湯雲は大きく右手を突き上げる。それに合わせて大きく歓声が湧く。

「私の完敗ですわ…大村さん。暴言を言ってしまい申し訳ありませんでした。」

「おう、良い試合だったぜ?ありがとうな。」

近づいて来て謝った湯雲はそう言いながら握手の為に右手を出す。

「……………あなた方を侮辱した私に握手を享ける権利はありませんわ。」

「んあ?お前謝っただろ?それでその件は終わりいいじゃないか。もう俺は別に気にして無いぜ。」

あいつも気にしていないだろうしと一夏の方をちらっと見る。

「あ、あ、ありがとうございます。」

「？ おう、ありがとうな。」

顔を真っ赤にしてるセシリアに湯雲は疑問を感じながら、握手をする。観客席からブーイングが出ているが気にしない。

「そ、それと、わ、私の事はこれからセシリアでいいですわ／＼。」

「おう、じゃ俺も湯雲でいいぜ。よろしくなセシリア。」

「よ、よろしくお願いします…湯雲さん。／＼／」

吃りまくっているのは気にしない事にした湯雲。

こうして、セシリア対湯雲の戦いは湯雲の勝利で決着した。

六話〱誇り高き暴君は大空を舞う〱（後書き）

うん……単一仕様能力が無理があるかな……？

意見やアドバイスがあったら宜しくお願いしますm〱〱m

第七話 異国より来たる、古き友 (前書き)

タイトルは3rdの隠しクエストの「獄炎に座す、霸たる者」、
極点より来たる、崩せし神」をもじったモノです (笑)

第七話 異国より来たる、古き友

【織斑君、大村君クラス代表と副代表おめでとう！】

クラス代表決定戦が終わった翌日、食堂内でパン！とクラスの子
たちがクラッカーを鳴らして一夏たちを祝福す。

「あ、ありがとう。」

「ま、頑張るから応援してくれ。」

勢いに圧され、戸惑う一夏とその雰囲気慣れて少し面倒そうに
える湯雲。

「そついえばなんで俺が代表なんだ？セシリアに勝った湯雲じゃ無
いのか？」

「辞退した。」

「はあ！？なんで!？」

「面倒だから。」

湯雲は悪びれもせず、さらっと答える。

「大体俺はセシリアと決着をつける為にあの話に乗ったんだ。代表
なんざハナから興味無いし。セシリアと仲直りしたしな？」

「え!?!あ、はい／＼／」

振られてセシリアは真つ赤になるが湯雲は気付かない。
周りからジト目で睨まれて平然としているセシリアも大物かもしれない。

「じゃあ、 “セシリア” はどうなんだ？湯雲が辞退したなら代表はセシリアなんじゃ？」

セシリアの事を下の名前で読んだので筈がジト目で睨むが、一夏は気付かない。

「それはわたくしも辞退したからですわ！」

がたんと立ち上がり腰に手を当てるポーズをする。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ。」

湯雲は若干呆れた表情。

「それでまあ、私が湯雲さん達を侮辱した事を反省しまして……」

ピシッと一夏を指差す。実に板に付いているポーズだ。

「一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたの。やはりIS操縦には実践が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんもの。」

「ま、そういう事だ。精進するんだな。」

「不幸だああああアアアア!!」

頭を抱えて嘆く一夏。

そこへ

「はいはい、新聞部です。今話題の織斑一夏くん、そして大村湯雲くんに特別インタビューに来ましたー!」

周りからは歓声上がる。

「私は黛薫子、新聞部の副部長やってます。はいこれ名詞」

そう言つて名刺が差し出される。

「ではまず最初に大村くん! クラス代表を辞退したと聞きました
がなぜですか!?!」

ボイスレコーダーをググツと向けてそう質問する。

「面倒だったから。」

「お、おいインタビューにそれは無いだろ……。」

再びしれつと言つ湯雲に一夏が何か言つ様に促す。

「大丈夫だよ。捏造するから。」

（（おいおい））

「それでは次に織斑くん、クラス代表になった感想を、どうぞ！
」

「え〜と、まあ、なんというか・・・ がんばります」

「お前も大した事言っただけだな」

「ぐっ！」

湯雲の突っ込みにグウの音も出ない。

「え〜と、それも捏造するとして」そんな捏造するんだっいたらインタビューする必要無いのでは？と疑問を感じるが誰も言わない。

「それじゃあセシリアちゃんもコメント頂戴」

「わたくしこういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

いつの間にかすぐ傍にいたセシリアが立ち上がった。
言った台詞と表情が完璧に食い違っている。満更ではなさそうである。

なんだか髪の毛のセットがいつも以上に丁寧な気がする。

「あ〜長くなりそうだし大村君に惚れたとか適当に捏造するからいい

いや。」

「な、な、な／＼／」

セシリアは顔を真っ赤にして口をパクパクするが、湯雲は訳がわからずきよとんとする。

その後、湯雲、一夏、セシリアの3人で写真を撮ろうとする時にクラス全員が入り込んだりとワイワイ騒ぎ、最終的にお開きになったのは夜遅くだった。

4月下旬 グラウンド

授業の為に一年一組の生徒はISスーツを着て全員集まっていた。

「大村君って結構鍛えてるんだね。」

「ああ、まあ少しはな。」

クラスの女子に話しかけられて、無難な返事をする。実際腹筋も浮き出ているし、ISスーツとして着ているジャンボスタイルのインナーの下もかなり引き締まっているのがわかる。

「じゃあ、腕や腹にある切り傷みたいな跡は何なんだ？」

「これは……喧嘩でへましちまってな……。」

懐かしそうに答える湯雲の顔はどこか綻んでいた。実は胸の部分は

爪で切り裂かれた様な大きな火傷の跡があるのだが、インナーに隠れてて見えない。

この話には、触れてはいけない気がして話題を変えようとするところ、ちょうど千冬と真耶が来た。

「これより、ISの基本実技訓練を開始する。オルコット、織斑、大村、ISを起動しろ。」

「はい。」

「は、はい!」

「あい。」

湯雲が出席簿で叩かれたのは言うまでもない。

3人はISを起動し、装着する。

「よし、では飛んでみる。」

「」「」「はい。」

同時に飛び上がり、20メートルの高さで静止する。一夏が少し遅れて到着。

「何をやっている。スペック上では白式のほうが上だぞ。」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。」

千冬に怒られて一夏はぼやく。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ。」

「んな事言っただつてさ、角錐をイメージってのが分かんないんだよなあ。そもそも、なんでこれで飛べるんだ？」

「説明してもかまいませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動破干涉の話になりますもの」

「わかった。説明してくれなくていい。」

「じゃあ、湯雲はどんなイメージをして飛んでるんだ？」

「んあ？ああ、俺は空を飛ぶ竜のイメージだな。」
セシリアと一夏のやりとりをぼーっと眺めていた湯雲が答える。勿論、イメージをしていた“空を飛ぶ竜”とはリオレウスである。

「……………」

「？どうした？2人とも黙っちゃまって。」

「いや、湯雲がこんなロマンチストだとは思ってなくて。」

「そ、そうですね／＼」

「ほっとけ！」

セシリアは湯雲のしゃべっている時の生き生きとした表情に見とれていたのは秘密だ。

「何をしている！さっさと降りてこい！」

上のギヤアギヤア言い合っている様子を見兼ねた千冬から通信が入る。

「了解つと。んじゃ、先行くな。」

湯雲が最初に降下し、セシリアもそれに続く。最後の一夏は

ドオオオオオン！！！！

「……………確かに早く降りてこいと言ったが、誰がグラウンドに穴を開けると言った。」

「……………すみません。」

「大丈夫か！？一夏！？」

「大丈夫ですか？一夏さん？」

「ま、一夏なら大丈夫だな。」

箒、セシリア、湯雲が心配して駆け寄る。最後が心配をしているのかは疑問だが……………。

「まったく……………では次に武装を展開しろ。織斑、何をそんな所でぼつっと浮かんでいる。さっさとならばんか。」

「は、はいっ。」

一夏は慌て湯雲の隣に並ぶ。
そして一夏が左手で右腕を握りしめると、光りの粒子が手のひらから放出され、ゆっくりとだが像を結び形として形成され雪片Ⅱ型が形成された。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ。」

しかし、千冬は褒めるどころかキツイ言葉を一夏にあびせる。

「オルコット、武装を展開しろ。」

「はい。」

そうしてセシリアは左手を肩の高さまで上げ、横に突き出すとその手にスターライトmk?が握られていた。

「流石は代表候補生と言ったところか。だが、そのポーズは止める。横に向かって展開させて大村を撃つ気か?正面に展開するようにしろ。」

「で、ですがこれはわたくしがイメージをまとめる為に必要な

」

「直せ。いいな?」

「……………はい。」

不満そうな顔をするセシリアだが千冬の一睨みで納得させる。

「ハア、次大村。やってみろ。」

「了解。」

返事をした瞬間、身長ほどのアーティラートが右手に展開され、湯雲はそれを握るとぶんぶんと振り回す。

「流石に慣れているな。だが危険だから振り回すな馬鹿者。いいか、織斑、オルコット、これが正しい武装の展開だ。よく覚えておけ。」

「「はい。」」

「ではオルコット、近接用の武装を展開しろ。」

「え？あ、は、はい。」

千冬に言われセシリアは直ぐに武装を展開しようとしたが、スターライトmk?の様に直ぐには展開できずに光りの粒子が彼女の手中で漂っている。

「クッ！」

「まだか？」

「も、もう直ぐです・・・ああ、もう！『インターセプター』！」

千冬の催促にセシリアは武器の名前をやけくそ気味に叫ぶとその手にショートブレードが現れた。

「……何秒かかっている？お前は実戦でも相手に待ってもらおうのか

「？」

「じ、実戦では近接の間合いには入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう、織斑との対戦で初心者に簡単に接近を許し、大村には何度も容易く懐に入れ、負けたのはどこの誰だ？」

「ぐっ！」

グウの音も出ないセシリアは、一夏の方と湯雲をキツと睨みつけた。

「まったく、専用機持ちと言ってもこれでは話にならん。大村、この中で一番ISを使えるのはお前なのだからしっかり指導してやれ。いいな？」

「え〜〜？」

バシンッ！

「いいいな？」

「〜は、はい」

「よろしい。では、今日の授業はここまでだ。織斑、グランドを片付けておけよ。」

その言葉を聞き一夏はこの世の終わりのような顔になったのは言うまでもない。

「おう、一夏……って生きてるか？」

一夏は真つ白な灰になっていた。

「湯雲か……昨日のクレーターを埋める作業…死ぬかと思った…。」

「……………」

掛ける言葉が見つからない。

「織斑くん、大村くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？つて織斑君大丈夫？」

「おはよ……………」

「おはよう。まあコイツは放つといて、転校生？今の時期にか？」
今の時期に入学ではなく、転入という形でIS学園に来るとい
事は……………」

「うん、何でも中国の代表候補生なんだって。」

「ほお。」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」
いつの間にかセシリアが何時もの様にポーズを湯雲の隣に登場した。

「別にこのクラスに入るわけではないだろう？騒ぐほどの事ではあ
るまい。」

いつの間にか篠ノ乃の奴も一夏の隣に立っていた。

「どんな奴なんだろうな。」

復活した一夏が話に入ってくる。

「む……………気になるのか？」

「ん、まあな。」

「ふん…………。」

一夏のそんな態度は箒的に気にくわなかったらしく、鼻を鳴らしてむくれてしまった。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのに！」

「そう！そうですわ一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。相手ならこの私と湯雲さんが“2人で”務めさせていただきますわ／／／」

「俺はそれで別にいいぜ。千冬さんから一応お前らを鍛えてくれって頼まれているから。」

「そ、それでしたら今度2人つきりで訓練を／／／」

「おいおい…………一夏の訓練が先だろ？」

「それもそうですわね……。」「ねーねー！でもさ、今の所専用機もっているクラス代表は一組と四組だけだから、余裕だよ」

話に入ってきた一人のクラスメイトに一夏は返事をしようとした時、

「その情報、古いよ」

突如、教室の入り口から声が聞こえてきた。

クラスが一斉にそちらを向くと髪をツインテールにした小柄の少女が片膝を立ててドアにもたれかかっていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないよ！」

「おまえ、鈴……？鈴なのか？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンヤン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ。」

鈴音はフツと軽く笑いながらツインテールを揺らしてみせる。

「なにカッコつけてんだ。すげえ似合わないぞ。」

「んなつ……！？なんて事言うのよ、あんたは！」

「なあ、一夏。この小さいの知り合いか？」

湯雲が突然現れた鈴の知り合いらしい一夏に尋ねる。

「小さいのって……！あんたねえ……！」

「おい。」

「なによ!?!」

（（（あ……）））

バシッ!!

いつの間にか鈴音の背後に立っていた千冬が彼女の頭に強烈な出席簿攻撃が炸裂した。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ。」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ、さっさと自分の教室に戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ。」

「は、はいつ!」

千冬の登場に怯えながら、ドアから退いた鈴音はまた一夏と湯雲の方を向くと、

「また来るからね!逃げないでよ、一夏!とそっちも!」

「え!?!俺も!?!」

「さっさと戻れ!」

「は、はい!」

そうして鈴音は自分の教室に逃げるように戻っていった。

その後、彼女との関係を問い詰めようとした筈やクラスの女子が冬の出席簿の餌食になった。

第七話 異国より来たる、古き友 (後書き)

詰め込み過ぎたかな…？ (- ;)

八話、猛き王者、大空より降臨す（前書き）

ちよつと短め。ここから話がちよつとずつズレていきます。

八話〜猛き王者、大空より降臨す〜

昼休み、食堂に向かうのは授業に集中してなくて怒られたのを一夏の所為にする筈と訳が分からず、取り敢えず宥める一夏。それとセシリアと湯雲である。

食堂には

「待ってたわよ一夏！」

二組の中国代表候補生、鳳 鈴音が居た。

「鈴、なんでラーメン持ってうるうるしてるんだ？そこに居たら邪魔になるぜ？」

「う、うるさいわね！わかってるわよ！」

そう一夏に尋ねられて席を取りに行く。

「で、いつ代表候補生になったんだ？」

「あんだこそ、ニユースで見た時はビックリしたじゃない！」

「俺だって、まさかこんなトコに入るなんて思わなかったからな」

「入試の時にIS動かしちゃったんだっけ？　なんでそんな事になっちゃったのよ？」

席を確保し、食事をする一夏達。湯雲とセシリアは我関せずという

雰囲気に対し筈は鈴に敵意の籠もった視線を投げ掛けていた。

一夏は何でも高校入試の時に入試会場である私立の多目的ホール内で道に迷い、偶々入った部屋の中に置いてあったIS、打鉄に触ったところ起動してしまっただけらしい。

「ふん。で、そっちの2人は何なの？」

鈴は視線で湯雲とセシリアを指す。

「私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ。」

「俺は大村湯雲だ。よろしくな。」

「宜しく。あたしの事は鈴で良いわよ。」

「俺も湯雲でいいぜ。」

「私もセシリアでいいですわ。」

セシリアと鈴はお互いに害は無いと判断したのか、簡単に打ち解ける。

「そういえば一夏、あんた一組の代表になったんだって？」

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが…？ま、まさか…ここいつとっ、つき…付き合っているのではないだろうな！？」

「べ、べ、べ別に…！」

何故か鈴音の方が狼狽する。当の一夏は何言っているのだと言わんばかりに笑い、否定する。

「落ち着けて、何を興奮してるのか解んねえけど、鈴は只の幼馴染だよ。」

「むう……………」

今度は鈴音の機嫌が悪くなる。さすがに気付いてないと言っても恋している乙女の前で言うべきモノではない。「幼馴染……………」

「あゝ、えつとだな……………」

箒の場合、幼稚園の頃から小四の終わりまで一緒だった。そして、箒が引越してから小五の頭に鈴音が引越して来て、中二の終わりに国に帰った。丁度入れ違いで一夏と一緒にいた幼馴染になる。

「鈴、こいつが篠ノ之 箒、前に話しただろ？ 箒はファースト幼馴染で、お前はセカンド幼馴染ってとこだな。」

「ファースト……………」

「ふうん、そうなんだ……………初めまして、これからよろしくね？」

「ああ……………こちらこそ。“色々”よろしく頼む。」

「なあセシリア、2人で他の場所で食べかないか？」

「な、何故ですの／＼／」

「面倒な事になりそうだし……巻き込まれて遅刻しちゃ、たまったものじゃないだろ？」

夫婦ゲンカは犬も喰わぬって言うしな。」

「ちょっと違うと思いますけど……そ、それもそうですね／＼」

箒と鈴音は互いに笑っているが、ヤバイオーラが出ていた。

湯雲は敏感に感じ取ってセシリアに避難を提案する。セシリアは湯雲と2人で居れるという事で承諾。

早々と退散した湯雲とセシリアは遅刻を免れた。

放課後

一夏達の訓練をする為、湯雲とセシリアがアリーナへ行くと先に来ていた一夏、箒、鈴がギャアギャア騒いでいる（実際騒いでいるのは箒と鈴なのだが）

「おいおい、どうしたんだ？」

「お前あんたには関係ない（わよ）！！」

状況がわからないので、事情を聞こうとしたら箒と鈴の連携攻撃を受けてorz状態になる湯雲。

事情を聞いたところ、どちらが一夏と訓練をするかでモメていたらしい。

(根本的に、教えていたのは俺なんだが……。)

心の中で呟く湯雲。口に出しても結果が見えている。

結局、今日は箒と鈴にコーチを任せ湯雲は見学。セシリアも湯雲の傍にいる。

「行くぞ(わよ)一夏!」

「ち、ちよつと待てお前ら!湯雲、セシリア助け……ギヤアアアアアアアア!」

一夏、南無……。

その日の夜、湯雲が一夏の部屋に行こうとすると

「最つつつ低!女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ!犬に噛まれて死ね!」

バタンツ!と勢い良くドアが開き大きなポストンバックを持った鈴音が出てきた、その目には涙が溜まっていて、怒っているように悲しんでいるような表情をしている。

「どうしたんだ鈴?」

「ゆ、湯雲……なんでも無いわよ!」

鈴はそのまま走っていく。

「なんでも無いなら、なんで涙目なんだよ……。」

湯雲のぼやく声は静かな廊下に響く。

一夏が鈴音を怒らせた翌日、生徒玄関廊下前に張り出された紙にこう書いてあった。『クラス対抗戦日程表』

『一回戦 一年一組織斑一夏 対 一年二組鳳鈴音』

「今の内に謝るならボコボコにする度合いを緩くしてあげるけど?」

大会当日、まだ怒っている鈴が譲歩と言えない様な譲歩を提案する。

「そんなのいらねえよ。全力で来い。」

その鈴の提案に一夏が言い放つ。

その言葉にムスツとしながら鈴は更にいう。

「絶対防御も絶対じゃないのよ? 防御を破壊して直接ダメージを与える事も出来るんだからね? 覚悟しなさいよ!」

そう言いながら双天牙月を連結させる。

一夏も雪片式型のビーム刃を展開した。

『クラス対抗戦、凰 鈴音対織斑 一夏の試合を開始します。ソレでは両者、始めてください!』

始まった瞬間、両者の武器はぶつかり合い、ガギンツ! という音と共に激しく火花を散らした。

「ふうん……初撃を防ぐなんてやるじゃない。」

「……………どうも。」

「じゃあ、これはどう!？」

鈴のISの肩アーマーが開き、中心の球体が光った瞬間、一夏は殴られた様に反対のほうに吹き飛ばされていた。

「なんだ? あれ?」

「衝撃砲ですわ、空間自体に圧を掛け、砲身を生成、その余剰で生じた衝撃を砲弾にして打ち出したのです。」

「利点としては、砲身と砲弾が見えない事だな。」

湯雲はそれを聞きながら対処方法を考える。

元の世界には角を壊さないと姿が見えない古龍「オオナズチ」

が居た。オオナズチは姿が見えない替わりに凄まじい殺気を放って

いたので慣れるとそこまで厳しい相手ではなかった。

「殺気で攻撃を見極められないかな……。」「

ぼそりと呟くが箒は聞こえていたらしく、

「今の一夏には無理だろうな。」「
と返す。

「？え？なんの話ですか？」「

話に付いていけないセシリア。

一夏は瞬間加速で距離を詰める。
イグリニッシュンフースト

「ハアアアアアアア！！」

鈴に刀が届く直前

ズドオオオンッ！！！！！

大きな衝撃がアリーナ全体に走った。そこに居たのは全体装甲のIS
フルスキン

「な、なんですかのあれは！？」

「わからん……。とにかく官制室に行ってみよう。」「

「ああ！」「

官制室に行くとは何故かコーヒーを無理やり真耶に飲ませようとしている千冬。

「織斑先生！……ってなにやってるんすか？」

湯雲が呆れた声を出す。

「いや、まあちょっとな。で、どうした？」

「一夏と鈴の救助を！」

「そうしたいのは山々なんだがな、これを見る」

急かす筈に落ち着き払った千冬は端末の画面を数回叩く。セシリアがその画面を覗き込むと、

「遮断フィールドがレベル四に設定……？しかも扉がロックされて
あのISの仕様ですよ！？」

「そのようだ。これでは避難する事も救援にもいけんな。どうした
ものか……。」

一夏と鈴も連携して攻撃をしているが、ジリジリと押されている。
そこに、

「……なっ！？」「」「」

上空から巨大な火球が降り注ぐ。火球は全身装甲のISに直撃し、
原型を留めない程溶ける。

「なんで！？ “ここ” に居る！？」

火球を放った主は咆哮しする。

「リオレウス！！」

空の王者、リオレウスは地上に降り立った。

八話、猛き王者、大空より降臨す、（後書き）

セシリア役得WWW

九話〜ウサギからの贈り物〜（前書き）

東さんの口調が変かもしれません。 m (| (m

九話〜ウサギからの贈り物〜

「織斑先生！アリーナの生徒の避難は済んでますよね？」

「織斑達が全身装甲のISと交戦している間に完了しているが大村、どうするつもりだ？」

「アイツを止めに「待て。「っ！何で！？」

官制室を出ていこうとする湯雲を止める。

「……………背中に誰か乗っている。」

「……………はあ！？」「……………」

ゆっくりと一夏と鈴の前に降り立ったりオレウスの背には確かに人が乗っている。その人物はウサミミの様なものを着けていた。その様子に、

「……………まさか……………」

箒と千冬が呟く、

「ちーちゃん……………ん！！」

リオレウスの背に乗って居たのはそのまさか、ISの開発者であり、千冬の幼なじみ、箒の姉の篠ノ之束だった。

「やあやあ、会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう

「愛を確かめ……ぶへっ」

跳びかかってきた篠ノ之博士の顔面を片手で掴みアイアンクローをキメる。

「うるさいぞ、東。それよりコイツはなんだ？」

キメながらリオレウスを指さし尋ねる。

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ！リツちゃん？東さんのペットだけど？」

「リツちゃん！？このリオレウスがペット！？」

東のペット発言に湯雲が驚愕する。

「やあやあ、色々事情を知ってそうだねえ。君が“例”の？」

「そうだ。大村湯雲だ。」

東の問いかけに答える千冬。

「ふん。リツちゃんは東さんの工房ラボの近くに現れて、面白そうだから手なずけたんだよっ。リツちゃんはいいい子だよ？」

それに答えるように唸るリオレウス“リツちゃん”

そして、いたずらをした子供の様に笑う東。天才は規格外である。

「あ、後君にプレゼントがあるからこっち送るね」

「は、はあ……。」

その答えに満足したのか、今度は箒に近づく。それに答えるように唸るリオレウス事“リツちゃん”

そして、いたずらをした子供の様に笑う束。天才は規格外である。その答えに満足したのか、今度は箒と一夏に近づく。

「やあ！」

「どうも………というか、お久しぶりです、束さん」

「……………どうも。」

「えへへ、久しぶりだね箒ちゃん、いつちゃん。こうして会うのは何年ぶりかなあ。箒ちゃんもおっきくなったね。特におっぱいが……」

「がんっ！」

「殴りますよ！」

「な、殴ってから言ったあ………。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！箒ちゃんひどい！」

「ははははは……」

頭を押さえながら涙目になって訴える束。一夏は乾いた笑いをするしかない。

「で、束。このISは「束さんじゃ無いよ。」「……………そうか。わか
った。」

では奴らか、と誰にも聞こえない声で呟く千冬。

「まあいつちゃん達も助けられたし、ゆっくんと会えたから束さん
は帰るね。ちーちゃんお別れのはぐを！」

「ごんっ！」

「帰れ！」

「……………っ！ううう……………ちーちゃんが冷たい！」

と束はぶつくさ言いながらもリオレウスに乗る。

「このISは持って行かなくて良いのか？」

「別にいいよ……そっちで調べれば……？じゃあね……」

束はリオレウスに乗って帰って行く。

「……………なんだったんですの？」

「……………さあ？」

「……………ゆっくん？」

セシリア。鈴、湯雲は呆然とする。

その後、全身装甲のISはやはり無人の事がわかった。東が知らないという事からコアも467個とは別のモノだろうという結論が出された。

休日を挟んで月曜日、湯雲はぼーっと自分の席の座ってISのカタログを見ながら談笑をしている一団を眺めていた。

「ねえ、大村君のISスーツって特注品だよな？」

「んあ？まあ、オーダーメイドだな。でも性能は普通のと変わらんぞ。」

談笑をしていた一人に話かけられて、少し慌てながらも答える。

「へえ〜。でも、デザインだけ変えたの？」

「ああ、それはな……」

“元の世界でいつも着ていたから”なんて答える訳が無いので当たり障りの無い感じで答えようとする矢先、千冬と真耶が入ってくる。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

千冬が入ると、教室の空気が朝ののんびりとした雰囲気から一気に

ピリツとしたものに変わった。これも才能の一つか、と湯雲が考え
ている間に千冬が教卓に立ち、連絡事項を伝える。

「さて、今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるが
ISを使用しての授業になるので各人、気を引き締めるように。各
人のISスーツが届くまで学校指定のものを使うので忘れないよう
にな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。
それもないものは、まあ下着でかまわんだろう。」

((おいおい……))

男子二人が心の中で突っ込む。

「では、山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ。」

千冬と真耶が場所を交代する。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！なんと二名で
す！」

「……………ええええええっ!?」「……………」

これには、クラス全員が驚く。

「失礼します。」

「……………」

入って来たのは、制服を軍服風にアレンジした眼帯を着けた銀髪
の女と金髪を後ろで一つに纏めた男。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不
慣れなことも多いと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

金髪の男 シャルル・デュノアが一礼する。

クラスにいる全員が啞然とする。

「お、男か……？」

湯雲が尋ねる。

湯雲としては体つきが明らかに女性のそれだったので聞いたのだが、
別のとらえ方をしたらしく

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方たちがいると聞いて本国から転
入を」

と湯雲に受け答えるシャルル。

「きゃ……………」

「はい？」

「きゃあああああ—————っ！」

バインドボイス（大）発動。

窓ガラスが割れそうな音量に耳を押さえる。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！織斑君や大村君と違う守ってあげたくなる系の！」

好き勝手言うクラスの子に困惑するシャルルと呆れた様にコマカミをほぐす千冬、おろおろする真耶、無表情のラウラ・ボーデヴィツヒの構図である。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬が面倒くさそうに場を収める。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんから〜！」
真耶も懸命にHRを続けようとする。

もう一人の転校生 ラウラ・ボーデヴィツヒはクラスの女子たちをちらりと見ただけで、視線は千冬に向けられている。

「……………」

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官。」

教官？と湯雲は疑問符を浮かべる。教官と言えば赤っぽい防具を着けて腕組みをしているイメージしかない湯雲である。
千冬は昔教官だったからよく腕組みをしているのか、と関係無い事を考える。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました。ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

「あ、あの、以上……………ですか？」

真耶が恐る恐る聞く。

「以上だ。」

真耶涙目。

ラウラは一夏に近づいていく。ラウラから殺気が出ているのを感じて湯雲は有りつたけの殺気を込めてラウラを睨むと、ラウラが驚いた様に振り向いた。それを感じられた千冬、箒と微妙にわかったらしい一夏もこっちを見た。

殺気を込めて睨んだ意図がわかったらしく、何もせずに空いた席に座る。

「あ……………ゴホンゴホン！ではHRを終了する。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS実習を行う。解散！」

千冬が手を叩いて行動を促す。一夏は訝しげな表情をしていたがそのは言ってられない。

着替える為に、更衣室に行かなければならないからだ。

「おい織斑、大村。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう。」

「はい。」

「君たちが織斑君に大村君？初めまして。僕は」

「ああ、いいから、とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。」

「一夏準備できたか？」

「おう。」

一夏と湯雲はスーツの入ったバッグを持つ。

湯雲がシャルルの手を引いて教室を出る。

「簡単に言うけど男子は空いてるアリーナの更衣室で着替えないといけないんだ。実習のときはいつもこうだから慣れてくれよ。」

「う、うん」

階段を下って一階に向かう。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも、織斑君に大村君も一緒！」

面倒なのに見つかった。1人に見つかりと30人には増える。足止めをくらってたら確実に授業は遅刻してしまう。そうなる出血簿の餌食になる。

「いたっ！こっちよ」

「者ども出合え出合えい！」

ここはいつから武家屋敷になったんだろうか。

「織斑君たちの黒髪もいいけど金髪つてのもいいわね！」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！見て見て！あのふたり！手！手繋いでる！」

「日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

河原に花なんて生えているだろうか？と湯雲は思考のループに入るところを一夏が押し留める。

「おい湯雲。湯雲！」

「……………ん？なんだ？」

「なんだ？じゃない！俺が困をやるからお前とデュノアは先に行け。」

「あいよ。じゃ、デュノア済まんが少し我慢してくれ。」

「ふえ？わああ！」

湯雲はシャルルをお姫さま抱っこ……………ではなく肩に担ぐ。

一夏と二手に別れてアリーナに向かうが追っ手との距離をどんどん広げる。

元の世界でのリオレウスやディアブロスとの追いかけてここで鍛えた脚は伊達じゃない。あつと言う間に更衣室に着いた。

「つと到着！一夏はまだだな。済まん、急に担いじまって。」

「だ、大丈夫だよ。でもなんで皆追いかけて来たの？」

「ふう、到着！この学園に3人しかいない男が珍しいんだろ。」

ちよつと、更衣室に着いた一夏も会話入る。

「ま、これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。」

「よろしくなデュノア。俺は大村湯雲だ。湯雲でいいぜ。」

一夏が自己紹介をして、湯雲がそれに続く。

「うん。よろしく一夏、湯雲。僕のことシャルルでいいよ。」

「わかった。シャルル。」

「よろしくシャルル。」

自己紹介も済んだトコで着替えをする。

「わあっ！？」

急にシャルルが慌てだす。

「どしたシャルル？さっさと着替えねえと授業に遅れちまうよ。織斑先生時間に厳しい人だから。」

「ああ、千冬姉は時間にうるさいぞ」

「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、その、あっち向いてて……
…ね？」

「????いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……っ
て、シャルルはジロジロ見てるな。」

「み、見てない！別に見てないよ!?!」

「お前ら早くしろよ。」

見てる見てないの押し問答をしてる一夏とシャルルに湯雲が突っ込む。

授業は真耶対鈴・セシリアで鈴達が瞬殺されてしまった事から教師の強さを改めて実感した。

その後、午前中はISの動かし方を教わり、昼休み。

「……………どういうことだ？」

屋上で自分の箸を握りしめる。

ここに居るのは、一夏、湯雲、箒、セシリア、鈴のいつものメンバーとシャルルである。

箒は一夏を屋上で食べるように誘ったら、関係無いのも着いてきたという話だ。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ？それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし。」

「違うない。」

呑気に答える一夏と湯雲。

「それはそうだがな……………」

箒は拳を握り締めているその手には一夏分の箒お手製のお弁当が握られている。

湯雲が誘ったセシリアも複雑な顔をしている。

「はい一夏。アンタの分」

鈴が一夏にタッパを放り投げてる。

「おお、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょ。」

タッパの中身は酢豚だった。但し、酢豚オンリー。

「そつえば湯雲の弁当は何なんだ？」

「肉。」

一夏の問いかけに湯雲が実に簡潔に答える。

実際にお弁当は骨付きの大きな肉が沢山。
これには全員の顔が引きつる。

「コホンコホン。……ゆ、湯雲さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めてしまいました、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ。」

そう言つて、セシリアがサンドイッチを手渡す。

「悪いなセシリア。(パクっ)ん?これ甘いぜ?」

「そ、そんな事は!(パクっ)あ、甘い……。」

「(パクっ)確かに甘いな……。味見したのか?」

セシリア、凍り付く。

味見を完全に忘れていた。

「今度は気を付けるよ?」

そう言いながら湯雲はサンドイッチをパクつく。

「湯雲、なんでそう言いながら食べてるの?」

「もったいないだろ?せっかく作って貰ったのに。食べないって訳じゃないし。」

と、シャルルにさも当然という風に返す。これにはセシリアも顔を

赤らめて涙ぐむ。

「そういえば、本当に僕が同席してよかったのかな？」

湯雲の隣に座っていたシャルルが申し訳なさそうにしながら湯雲と一夏に尋ねてきた。

「問題無いだろ。それに学食だとゆっくりできないしな。」

サンドイツチを食べながら湯雲が答える。

「でも……」

「心配すんな。色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこうぜ。わからないことがあったらなんでも聞いてくれ　湯雲にな。」

「なんで俺だけ!？」

一夏を湯雲に突っ込む。ナイスツツコミに皆が笑った。

「そういえば、シャルルは何処の部屋なんだ？」

「確か……湯雲と一緒にだね。」

「そうか。じゃあ今度は一夏が一人部屋か。」

最初の期間は一夏が筈と二人部屋、湯雲が一人部屋で途中から湯雲と一夏で二人部屋だった。

「よろしくね、湯雲！」

「お、おう。」

シャルルの笑顔に何故かドキツとして湯雲は顔を赤らめる。

そのやり取りの間に一夏は幕に自分のお弁当を食べさせている。鈴は一夏を睨んでいる。

「ねえねえ、湯雲？これってもしかして日本でカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつだよね？仲睦まじいね！」

シャルルがそれを見て煽る。

「へ？なんか言ったか？」

「だ、誰がつ！なんでこいつらが仲いいのよ！？」

一夏と何故か振られた本人の湯雲がもう一度尋ね、鈴が必死に否定する。

気持ち良い晴れの中、お昼は過ぎていく。

午後は、ISの整備の実習。特にトラブルも無く一夏が出血簿の餌食になっただけで終了した。

「じ、実習は疲れるな……。」

「鍛え方が足りないな。」

「夏の眩きを湯雲が一蹴する。

「まあ、いいや。シャルル、湯雲着替えに行こうぜ。」

「そうだな。」

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行つて着替えてよ。時間がかかるかもしれないから、待ってなくていいから。」

「ん？だつたら待つぜ。」

「そうだぞ。別に待つてても平気だぞ？俺も待つのに慣れ……」

「い、いいからいいから！僕が平気じゃないから！ね？先に戻つてね？」

「お、おう。わかった」

「早くしろよ？」

シャルルが強引さに圧されて頷く二人。

「湯雲。行こうぜ」

「ああ。じゃあシャルル、先に行ってるぜ。」

「うん。」

その後、シャルルと合流し鈴やセシリア、篝も交えて食堂で談笑をしていると千冬が入ってきた。

「大村」

「はい。なんでござんしょ？」

「お前は何処の者だ？まあ、いい。束からプレゼントが来た。部屋に置いておいたから受け取れ。」

それだけ言っただけで去ってしまった。これを聞いて一夏達は顔を見合わせる。束からの贈り物 嫌な予感しかないのだ。

全員で湯雲とシャルルの部屋に押し掛ける。そこに在ったのは……………

「樽だな。」 篝

「うん、樽だ。」 一夏

「樽ですわね。」 セシリア

「……………。」 湯雲

そう、樽だった。それも少し小降りの。真ん中にはウサギのマークがある。

湯雲が近づくと、樽は大きく揺れた。

「う、動いた。」

シャルルが慌てて後退り、箒や鈴は身構える。
樽の揺れが収まり、嵐の前の静けさが訪れる。
そして、

「旦那さ〜ん!!!」

ニヤー!と鳴いて樽が割れ、中から出てきた毛玉が湯雲に飛び付く。
驚きながらも毛玉を湯雲は受け止める。

「……ね、猫!?!」「……」

「ミーシャー!?!」

「……はあ!?!」「……」

湯雲に飛び付いた毛玉はアメシヨ一の猫だった。それに一夏達は驚き、湯雲がその正体を知ってる事に更に驚く。

「ああ、こいつはオトモ……じゃなくて相棒のミーシャだ。」

「よろしくニヤー!」

ニヤー!と言いながら、右手(?)を挙げる。

「んで、どっしてここに?」

「それは、束さんに保護されたんだニヤー!それで旦那さんに会いた
いって束さんに言ったら、こっちに送られて来たんだニヤー!……
転校生として!」

え………

九話〱ウサギからの贈り物〱（後書き）

なんか、色々詰め込み過ぎた（汗

さて、ミーシャにISを持たせるべきか……………意見求む！

設定〱オートモアイル〱 (前書き)

色々悩んだ末にミーシャにもESを持たせる事にしました。

批判もあるでしょうけど、悩んだ結果ですm () m

設定（オトモアイルー）

名前：ミーシャ

毛並み：アメシヨール

備考：キッチンアイルーからオトモアイルーに転職した為料理も出来る。一応、雌。火竜に襲われた所を湯雲に助けて貰って以来、キッチンアイルーやオトモアイルーとして湯雲をサポートしている。

IS：ケンプファー（どんぐりメール）

待機状態：どんぐりが鈴の替わりに付いている首輪

武器：

オトモ鉄刀（小太刀）

タルハンマー（ハンマー）

大筒（手持ち式の大砲）

単一仕様能力：コンバット・ホルン

備考：コンセプトが戦闘支援の為、武装は少ない。大筒の閃光弾や単一仕様能力での支援が主体となる。

設定「オートモアイル」(後書き)

ISの名前の「ケンプファー」は違う“ミーシャ”の愛機です(笑)

第十話〜ミーシャ 来日〜（前書き）

短いです

もうちょっと書いてからにしようと思ったんですけど、そのなるよりかなり後になるので途中で切って投稿しました。 m () m

第十話〜ミーシャ 来日〜

「今日からここに加入したミーシャだニャー！よろしくニャー！」

ニャー！と1年1組で挨拶をした湯雲のアイルー、ミーシャへの反応は凄まじかった。

「きゃあああああ！！！！」

「かわいい！！！」

「制服も着てる！！！」

「しかも似合ってる！！！」

「飼い主誰！？」

等々と歓迎されたミーシャはネコ一匹の為に席を使うことは出来ないの、湯雲の席 湯雲の膝の上で授業を受けることになった。勿論、湯雲は初めての頃のように視線地獄に曝された。

しかも、“IS学園に入った喋るネコ”を一目見ようと3年や2年の人も見に来る。ミーシャは気にしなかったが、湯雲や一夏は気が休まらなかった。

昼休み

一夏達は、屋上に居た。

「しっかし、なんでネコがIS学園に入学出来たの？」

鈴がため息をつきながら尋ねる。IS学園はペットなどは禁止の筈である。

「俺には身寄りが無いし、頼る人が居ないから保護って感じかな。」
と苦笑しながら答える湯雲に、しまったという顔になる鈴達。それを敏感に察知したミーシャが話題を替えようとする。

「そ、それに、ミーシャはISも持つてるし無問題ニヤ！」
モーマンタイ

この一言に一同は凍り付く。

「なあ、ミーシャ……お前専用機持つてるのか？」

「はい！持ってますニヤ！これがミーシャのIS“ケンプファー”
ですニヤ！」

と湯雲に答えながら鈴の替わりにどんぐりの付いた首輪を見せる。

「だ、だからIS学園に入れたのか……………」
（ 篤

「てか、ネコがIS起動するって（汗）」
（ 鈴

「男の立場はなんなんだ……………」
（ 一夏

ミーシャはネコでは無いので大丈夫（笑）

「そ、そういえば湯雲はミーシャがISを持つてる事を知らなかったの？」

「まあ、な。ちょっと事故で離ればなれになつてな。」

と湯雲はバツが悪そうに答える。

「でも、今は旦那さんと一緒に居れるから幸せだニャ！」

「ば、バカッ わかつたから飛び掛かるな！」

本当に嬉しそうに湯雲に飛び付くミーシャ。

その様子を羨ましそうに見ていたセシリアが

「そういえば、湯雲さんとミーシャさんが大切なパートナーなのはわかりましたが二人（？）は何処でお会いになったのですか？」

「ああ、それはな……………」

と湯雲とミーシャの出会いの話をしたり、一夏にどちらがお弁当を食べさせるかを箒と鈴が揉めたりと昼休みは穏やかな時間だった。

「ええとね、一夏がオルコットさんと凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ。」

「そ、そうなのか？一応わかつてたつもりなんだが……………」

放課後、一夏達はアリーナで訓練していた。
先程、シャルルと軽く模擬戦をした一夏はシャルルにレクチャーを
受けていた。

「一応じゃ意味が無いだろ。射撃武器つてのは近接武器と違って種
類によって色々違いが出てくんだよ。俺の武器がいい例だ。」

湯雲が老山龍砲を呼び出して説明する。

「例えば、コイツはヘビィボウガンって分類で単発の威力は高いが
大振りだ。

だから立ち回りに制限が掛かったり、反動がデカかったりする。」

んで、と言いながら今度は幻獣筒・三ツ角・を取り出す。

「こっちはライトボウガン。ヘビィとは逆に小さい分小回りが効く。
その替わり、単発の威力が低いんだ。まあ、速射機能つてのもある
が使う機会はあまり無いな。」

「なんでだ？」

「だって相手は人間よりちよつとデカくて且つ高速で動くんだぜ？
当てるのは難しい。しかも、連射中は足を止めて撃つのが基本だ。
隙がデカ過ぎる。」

「そ、そうだな……………」

「そつえば湯雲のISって銃は積んでないの？」

一夏と湯雲の会話を聞いていたシャルが疑問を口にする。

「ああ。積んで無い。ボウガンの方が俺は使いやすいし
はガンナーじゃ無いんでね。」 本職

とニヤリとしながら返す。

「じゃあさ、湯雲とシャルルが模擬戦してくれないか？色々参考に
したいんだ。」

「俺は構わんよ。百聞は一見に如かずって言うしな。」

「僕も大丈夫。」

こうして、一夏の提案により、湯雲対シャルの模擬戦が決定した。

11話 黒き兎は憎悪を宿す (前書き)

久々の投稿になりました

不備があるかもしれませんが () m

11話 黒き兎は憎悪を宿す

湯雲は“THE HUNTER”を展開して、シャルルと向き合う。シャルルの機体は真耶の使っていたデュノア社製“ラファール・リヴァイヴ”。

しかし、通常のラファールのようなネイビーではなくオレンジで全体的にシェイプアップされている他、所々違いが見られる。

「シャルルも専用機か。」

「まあね、カスタム機だけど。湯雲のISってなんか凄いな……。武骨な鎧に肩等から大きな角が突き出た湯雲のISを見て若干顔を引きたらせながらシャルルが話かける。

「俺の相棒だよ。それより やるぞ。」

「う、うん。」

湯雲が龍刀“劫火”を展開し、普段の呑気な雰囲気ガラリと変えたのを見てシャルルも戸惑いながら構える。

少しの間対峙し、先に仕掛けたのは湯雲だった。地面を蹴るようにして、素早くシャルルに近づこうとするがシャルルはサブマシンガンで段幕を張って牽制する。

湯雲はそれを見越していたので直ぐに回避に移る。

その後は湯雲はシャルルの射撃からひたすら逃げるだけ。

「逃げ回ってるだけじゃ勝てないよ!」

シャルルはそう言い放ち、サブマシンガンからアサルトライフルに切り替えて回避に専念している湯雲を狙い撃つ。

「じゃ、今度はこっちからだ!」

避けるのを止めて的を絞られないように動きながら、突撃する。

「貰った!」

シャルルのライフルが湯雲を捉えるが、

「ふんっ!」

ガキンッ!!!

「「「「えっ!?!」「」「」

湯雲は却火で直撃弾を斬り払った。

それにはシャルルは元より外から見ていた一夏達も驚く。

一瞬動きが止まったシャルルだが立て直して真っ直ぐに向かってくる湯雲にライフルを連射する。

しかし、湯雲は全弾斬って捨てる。

「それ（ライフル）の連射間隔はわかった!」

「くっ!!ならタイミングをズラすまでだよ!」

シャルルは連射を止めて発射タイミングをランダムにして撃つが、多少の被弾を無視して突っ込んで来る湯雲に接近を許してしまう。

「はっ！！」

「くっ……」

咄嗟に高速切替ラピッド・スイッチで盾を呼び出して初撃の袈裟斬りを防ぐが、柄での殴りからの斬り上げを貰う。

「やらせないよー！」

「ぐっ……」

ショットガンが展開されるのを見た湯雲は斬り下がりがつつ、回避するがショットガンの散弾が当たって大きくシールドエネルギーを削られる。

さらに高速切替で展開されたマシンガンの掃射を受ける。

「退けば負ける……なら攻める！！」

そう判断した湯雲は、装備をアーティラートイグニッション・ブーストに替えて瞬間加速で一気に距離を詰める。

「はあああああああ！……！！！」

湯雲は叫びながらシャルルに斬り掛かった……

湯雲は大剣をシャルルの“ラファエル”の寸前で止めている。

しかし、シャルルのアサルトライフルも湯雲の“HUNTER”の胸に狙いを定めていた。

「引き分け、だな。」

「そうだね。」

シャルルと湯雲がISを解除すると観戦していた一夏達が駆け寄ってきた。

「2人とも凄かったぜ！」

「お二人とも本当に凄かったですわね。」

「僕は凄くないよ。湯雲が武装を2つしか使って無いのに引き分けちゃったんだから。」

「ま、俺は近接武器の方が得意だからな。」

こんなのも有るぞ、と言いながらガンランス“エンデ・デアヴェルト”を展開する。

「まあいい。よし、一夏。大体わかっただろ？やれ。」

と、デアヴェルトを収納しながら一夏に言うが、

「そんな簡単に出来るか！！」

「一夏の言うとおり簡単に出来るわけないでしょ……。特にあのライフルの弾一本斬りは出鱈目よ。」

と一夏と鈴に突っ込まれる。

「そんな事は無いぞ。篠ノ乃は出来るだろ？」

その反応に不満そうにしながら湯雲は箒に振るが、

「一発なら私も対処出来るが何発もは無理だ。」

と返された。

「あれは僕もびっくりしたよ。どうやってやったの？」

「連射の間隔を見極めて、距離から着弾のタイミングを考えながら剣を振るだけだ。」

狙いは銃口の向きと、目線で大体わかる。」

シャルルの質問に簡単な事に答える湯雲に五人は呆れた表情になる。

「アンタって普段はバカっぽくて、のほほんとしてるのに戦いつてなるとコロツと変わるわね……」

「「「うんうん」「」」

「……………それ酷くないか？」

鈴の意見に、知り会って余り時間が経っていないシャルルも同意した事に湯雲はちよっぴり傷つく。

「……………とりあえず、太刀での立ち回りはわかっただろ？
ただ突っ込むだけじゃ駄目なんだよ。様子を見つつ、隙を突く方が
相手を崩しやすい。」

と、言いながら湯雲は強引に話を戻す。

「おう。てか、だからボウガンとか使わなかったのか。」

「一夏さん……………」

「太刀以外使ってもお前の立ち回りの参考にならないだろ……………お前はバカか？」

「うぐっ」

バカと言われるが正論なので一夏は言葉を返せない。

「はあ……………まあいい。一夏はとりあえず立ち回りとか間合いの狭め方とか篠ノ乃に見てもらえよ。剣道で動きが掴めるだろうからな。」

「なっ!?!」

「そ、そ、そっだな!よし一夏、”2人で”特訓だ!」

「お、おい箒……………」

湯雲の一言で慌てる鈴と逆に“2人で”を強調しながら箒は喜んでいる様子で一夏を道場へ引っ張る。

「ちよつと湯雲!ISを動かすのになんで剣道なのよ!?!」

「それも大事だが剣道で体で覚えた方がいいだろ?

と、言うかそんなに一夏の手伝いしたければ、剣道の後にISでやってやればいいじゃないか。」

食って掛かる鈴に面倒くさそうに湯雲が提案する。鈴は納得したように

「そ、そっよね。一夏!?!剣道が終わったらISで訓練よ!?!」

と、叫びながら一夏の方へ走っていった。

「ふふふ……………確信犯ですわね。」

「そっだね。」

苦笑しながらセシリアとシャルルが話すが、湯雲がなんの事かわからずハテナマークを浮かべているのを2人は

「鈍感……………」

と、呟く。

「湯雲っ！お前が教えてくれればいいだろ!？」

「俺は教官とか向いてないんだ。第一、面倒くさい（キリッ）」

「おい!?!」

必死に逃げてきた一夏が湯雲に泣き付くが面倒と一蹴する。そこに鈴と箒が戻ってきてもう一騒ぎになりそうだったが、近づいてきた一機のISによって打ち切られた。

「ね、ねえ、ちょっとアレ……………」

「うそっ、ドイツの第三世代型だ。」

「まだ本国でトライアル段階だつて聞いたけど……………」

湯雲達がそちらを見ると、そこにはラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

「なんだ？あのウルクススの耳が着いてるISは？」

「……………湯雲さん少し黙りましょうね。」

険悪な雰囲気を見捨てず話す湯雲をセシリアが黙らせる。

「おい。」

「なんだよ。」

「貴様も専用機持ちだそうだな。丁度良い。私と戦え」

「いやだ。戦う理由がない。」

「貴様にはなくとも私にはある。」

「今でなくても良いだろ？もうすぐクラスリーグマッチも有るんだし。」

「……………そうか。ならば。」

と言うと、ラウラは肩のレールカノンを一夏に向けて撃ったが、

ガキンッ！！

「！？」

「おいおい……………随分と丁寧なアイサツだなあ？おい」

「そうだね、ドイツ人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

一夏の前にはエンデ・デアヴェルトの楯の部分で砲撃を防いだ湯雲と、睨みながらラウラにアサルトライフルを向けるシャルルが立つ

ていた。

「ふん、訳もわからん全身装甲のISとフランスの第二世代型アンティーク如きで私の前に立ちふさがるとはな。」

「ほつとけ。お前には関係無い。」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルキーよりはマシだよ？」

一触即発の空気は、意外なところで破られた。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナのスピーカーから声が響いた。

「……ふん、今日は引こう」

そう言い残して、ラウラはその場を去っていった。

湯雲は去って行くラウラの背中をずっと睨んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8671s/>

IS ~ 狩人の系譜 ~

2011年5月31日22時12分発行